

降り続いていた雨が止み、初夏の陽が戻ってきた。

市街地の高架を抜け、スピードをあげ始めた急行電車の車内には眩しい光が射し込み、気怠そうな通勤客の表情を照らし出している。私は窓際の席に浅く腰を沈め、光を左頬に浴びながら、窓辺を流れていく景色に目をやっっている。

家々の屋根。庭のカシや珊瑚樹の芽。学校や病院の看板。スローパターの屋上へ続く廻り階段。教会の尖塔。錆色の鉄橋。トンネル。水を張らない田圃。神社の杜。一際高いビルディング。好評分譲中の文字。

最初の停車駅で、高校生の集団が雪崩れ込んできた。

降車口近くに陣取った彼らは、車内放送が聞き取れないほどの大声で、ホームからもち込んできたお喋りの続きを再開する。先客の私たちなど目に入らないのか、バッグやカバンを床に下ろし、携帯電話を奪い合い奇声をあげる。

いつものパターンである。複数の高校が沿線に並ぶのだから、遠慮などしていない。紺の制服は紺の制服同士で、金ボタンは金ボタン同士で、グリーンのスカートはグリーンのスカート同士で、その集団だけに通用するらしいことばを駆使し喋り合う。

こんな彼らの出現にも、今朝は気持を乱されれない。窓に肘を立て、左前方に目を止めている。

電車は、しばらく川添いを走り、工場群の中を走り、新興住宅地を抜け、やがて沿線第二の人口をかかえる街である二つ目の駅にすべり込んだ。デパートの二階部に当たるホームに停まり、ドアが開くと、高校生のお喋りも、この街に通勤する人の群も、どつと吐き出される。

すし詰め状態だった車内は、一挙にがらんどろになり、かなり空席が見えてくる。

車体を軽くした電車は、木立の中を走る。クスや、ケヤキや、ハゼの木立。

木立を抜けると、ゴルフ場の芝が広がり、そのアップダウンがしばらく続いたあと、まばらな松木立の中にクラブハウスとおぼしきレンガ造りの建物が見える。

電車は、クラブハウスの横を通過するとき、いつも極端な徐行をする。時速百キロを越えるスピードが、三十キロ程度以下に。いや、

どうかすると、本当に停車してしまうのではないかというほどのスピードになる。

最初、これはなにかの偶然かと気にもとめなかったが、毎日繰り返されてみると、そうもいかなかった。

その度に乗客の反応を窺ってみるのであるが、旅程の終わりに近い地点でののろろ運転など、思いにも止めることではないとみえ、客の半数は目を閉じ、残りの半数も新聞や雑誌に見入っており、反応があっても、到着時間を気にしてか、何人かが腕時計を覗き込む程度にすぎない。

運行時刻の調整か、信号の指示かのどちらかだろうと、この付近に住む知人は答えてくれたことがある。が、遅れ加減のときも、天候などにも関係なく決まって徐行をするということには、いまだ頷けない。

電車は、グラリとくる衝撃とともに徐々にスピードをとり戻し、ゴルフ場をやり過ぎしていく。車内アナウンスなどなく、なにこともなかったかのように、再びなめらかなスピードにのる。

ゴルフ場を過ぎ、しばらくすると、バイパスへの入口を示す青い表示が立っている。Dインターチェンジ、とある。

表示のすぐ下に小さな林。林の中に、墓石に似た石造りがあり、Dインターチェンジの表示から斜めに下ってくる石段が見える。

スピードにのった電車は、石段の形をはっきり見せるとまも与えず走り過ぎていくのであるが、私は、ときどき石段の中途に光るものを見る。

小さな鏡が陽にキラリと反射する。そんな一瞬の光。

光るものの存在に心をとめてから、そのあたりに目を凝らし続けた。Dインターチェンジの表示、林、墓石に似た石造り、雑木の下にくぐり込む石段と、からめとるように目で追う。たちまちのうちに、線路を交差して伸びるバイパスの陸橋に窓を遮られてしまうのであるが。

それが、昨日、男の子が小さな手鏡を走り抜ける電車に向けてかざしている姿を、バイパスの陸橋に遮られる瞬間、見たのだった。

確かに男の子だった。青いシャツを着た、多分まだ高校生ぐらいであろう少年。少年は、石段の中途に腰を下ろし、手の平に包み込めるほどの手鏡を、私たちの車両に向けていた。

昨日は曇り空であったから、少年の発する光は強いものではなかったが、それでも私の心に、あるインテンションを惹起させるに十分な力をもっていた。

その光を待っている。軽やかに揺れる林の淡い緑。刻まれたなにかの文字らしい、五つか六つの黒い窪みをもつ石造り。林の揺らぎ

に刷かれる石段。

次の瞬間、左窓を鈍色の陸橋の柱が覆う。

私は、目のうちに残っている水色の矢を、いま一度巻き戻してみる。林の揺らぎに刷かれる石段。石段の中途に、折れる影。細い人影。青い人影。そのいく分俯き加減の顔の中で、一文字に結ばれた唇。

七年前、私は希望を抱いて始業式に臨んだ。

大学院を出て初めての職場となった私立K高校は、急行電車の終点の駅からバスで二十分の高台にあった。二年F組が、私の担任だった。

二年生は、AからLまでの十二クラスがあり、約五百人の共学となっていた。K高校は、郡部に位置するあまり足がかりのよくない場所でありながら、県下では最もよく知られた進学校だった。

A組からC組までは特進クラスになっていて、D組からG組までは準特進クラスとなっていた。

野球やサッカーのスポーツでも、県下有数の強豪校に数えられており、県の代表として、たびたび全国大会にも出場した。

私は、準特進クラスF組の担任であり、英語の担当として特進クラスも受け持った。

二年F組の生徒たちの大半は、一年からの同じメンバーであるが、一割ほどが特進クラスからの降格組と、普通クラスからの昇格組で占められていた。具体的にいえば、降格組四人、昇格組二人を含め、四十一人で構成されていた。

一時間目、オリエンテーションを兼ねてそれぞれが簡単な自己紹介をした。中央の国立A大学を始め、かなり名の知れた国公私大に毎年五百人を送り込むK高校であるから、準特進クラスとはいえ、医学部を目指す者も数人いて、みんなの鼻息は荒かった。実際、準特進クラスからの合格データもかなりのもので、都市圏の上位の公立高校より数段抜きん出ている。

そのなかに、降格組四人が交じっているのだった。彼らにはどこかに共通したものがあつた。間の悪さというか、ずれているというか、そんなことばでは表しにくい一種の逃げの姿勢とでもいうべき、どこか投げ遣りな仕草があつた。

まともに目を合わせようとしめない。意味のつながらないことばの省略。制服のネクタイを解いたり結んだりしながら、自分の前から時間が過ぎるのをじっと待っているとでもいった、他の生徒にはない態度を見せた。

その意味がわからないわけではない。特進と準特進との差がいかほどのものかは知らないが、入学時の自信とプライドが、一年の間

に叩きつけられてしまったのである。

A組からC組にかけての十五人程度が、D組からG組の上位者と必ず交替するというシステムが、K高校の実力をさらに高めることになっている。

その役目の一端をになわされることになった、彼ら。

もつとも、いったん降格して初めて本当のやる気に目覚め、その一年後にはすぐに特進に返り咲くケースも多い。部活経験者などが好例で、部活と勉学を両立させる方法を会得してしまうと、今度は学年のトップクラスを走るといふことも稀ではない。

五百人のそれぞれが、中学時代にははるかに同級生を引き離してきた。要するに、一人一人がもともと並を越えた能力をもっている。

そんな彼らにも、序列というものが容赦なく襲う。入学試験の成績は、一点差や二点差でひしめいているのに、半月後の実力テストでは、明らかな開きが出る。それが一学期、二学期と過ごしていくうちに、おおかたの傾向が固まってくる。理数に強い者、弱い者、英語を得意とする者、不得手とする者、というふうになんかの開きが大きくなる。

リードする者はより高い結果を引き出し、リードされる者は、体育祭の綱引きよろしく、まだ足元の定まらないうちに一気に転がされてしまう。

なにしろ、K高校の授業のスピードといったら、三年のカリキュラムを二年の一学期までで終えてしまう。だから、入学後の一か月の過ごし方で、進学のこと、数十年後のことまで決まってしまうといわれている。

始業式後の一時間目のオリエンテーションは、かなり異様な雰囲気に進んでいった。

松村という普通クラスからの昇格者が、地元国立大学の歯学部をめざすと、制服の胸を叩いて宣言したものだからクラスが沸いた。

松村は、駅前に大きな看板を掲げる歯科医院の長男であるらしく、「姉ちゃんが歯学部に入ってるから、俺は医学部にいきたいんじゃないけど、普通クラスから上がってきたばかりじゃちよつとあつかましいからな。だから、今日のところは絶対現役で歯学部、ということにしとく。多分、俺、大丈夫だと思うよ。だってな、姉ちゃんだって、二年の今頃はボーイフレンドと夜中にめっちゃめちゃカーレースやってたんだぜ」と、茶色に染めた長髪を細い指で掻き上げた。

「姉ちゃんに病院とられないようにしろ」

「俺の歯は松村には診せねえよ。とてもじゃないけど、おつかねえよ。ロック鳴らして、そののりで痛んでもない歯に穴開けられたらたまらねえからな。その点、姉ちゃんの方が絶対いいよな。なんせ、

超ボインだもんなあ」

クラスの三分の二を占める男子がどよめき、指笛を鳴らす者もいた。

「バツカ野郎、お前の薄汚い虫歯なんぞ誰が診てやるかよ」

松村が、まんざらでもなさそうにウインクをして席についた。

「次、松山」

私は出席番号の、次の名前を呼んだ。

返事がない。

「松山」

応えない。出席簿の名前のところに、私だけがわかるように薄く鉛筆で印した*の記号がついている。*印は、四つある。つまり、特進からまわされてきた四人ということになる。

「松山はいないのか」

これまで呼んだ三人の、いずれも拗ねて目を伏せていた姿を思い、教室中を見渡してみる。といっても、教室の広さはいかほどでもない。

しかし、それらしい生徒はいない。クラスがざわめきだした。みんなも聞いたことのない名前らしい。

「浜田のことじゃないすか」

後列の生徒が叫んだ。

「だろう、なあ、浜田の名前がとんじまったよな」

クラスの視線が、一点に集まった。そこには、長髪ばかりのなかで一人だけ坊主頭の、利発そうに胸をはった顔があった。口元には、ほんの少しばかり笑みさえ浮かべている。

「浜田です」

生徒は、クラスの視線を持ち上げる格好でスツと立った。みんなのどよめきが止んだ。目を伏せる気配も、気負った表情も様子もない。落ち着いた間合いで、しっかりことばを発する。

「君は、松山じゃないのか」

なにか家庭的な事情があるのかも知れないとは思いながら、聞いた。

「松山です。これまで、浜田でした」

松山の目が私を真直ぐに見る。その目が、澄んでいる。

「本当は、ずっと浜田でいたかったんです。でも、母が再婚するんです。妹がこの春中学に入るんで、籍は早めに入れた方がよいだろうと、三月に届けたんです」

明るく笑った。丸い目が、大きく開かれています。

「そうか、悪かった。嫌なことを聞いてしまったな」

「平気です。今日から松山と呼んでください。で、ぼくは、天文学者になるために特に数学を勉強したいんです。今、とても大切な法

則を考えています。その法則が証明されれば、現在の物理学や天文学が根底から変わるかもしれませんが」

「ほう、そいつは凄い。頑張ってくれ」

理数に弱い私は、松山の話をそこまで打ち切った。

松山は、それ以上いいつのることもなく、落ち着いた表情で着席した。

クラス中が、低い笑いに包まれた。

職員室に戻り、二時間目の準備にかかっていると、二年B組担任の椿が寄ってきた。

「新任教師さん、第一印象はいかが。K高校がお気に召しましたか。今日のところはこんなんびりしたことをやっていますが、明日からはまさに真剣白刃どりの日々ですからね。まあ、よくこきつかってくれる学校ですよ。せいぜいご活躍ください」

と離れかけて、

「そうそう、浜田、いや松山はどうです」

「ああ、なんでも数学に磨きをかけたいといっていました」

「数学に。いや、やつらしい。そうですな、ご参考までに、是非松山の去年の資料に目を通してくださいな」

肩をポンと叩き、去っていった。

二時間目は、二学期までの学習スケジュールの説明と、進路希望を書かせたりして終わりだった。

私は、彼らの希望する進路を、それぞれパソコンに入力していった。準特進クラスとはいえ、最難関の国立A大学を希望している者も若干いて、地元の国立B大学を希望する者や、有名私立大学を希望する者に次いで三番目に多かった。

松山の希望も国立A大学理学部だった。私は、K高校独自で用いられているという偏差値と、彼らの進路とをマッチングさせてみた。

それぞれが自分の到達度をかなり正確に把握しているとみえ、国立A大学を希望する者も、国立医、歯、薬系を希望する者も、おおむね妥当な線にあるといつてよかった。

しかし、数名がD、Eランクという評価域にあり、松山もその中にいた。松山の場合、特に理数科目がEランクということで、英、国のCランクをも下回っていた。

一時間目のときの松山は、新しい数学の法則を導き、天文学を志すといっていた。

B組担任の椿のことばもあったので、私は松山の一年次の成績を繰ってみた。評点は、オール三に近く、といつてもK高校の評点三は、普通高校の評点四・五以上に匹敵するといわれているが、理科と数学の二という評点は意外だった。

その評点に添えられている「理数科目についての、基本的理解に欠ける」というコメントは、さらに意外だった。私は、理数科目についての基本的理解というものがどのようなものかよくわからないが、普通、教師は、このような決定的とも思える評価はしない。そう思っただけの生徒の評価にも目を通して見たが、その類の例はなかった。

K高校は担任とクラスの結びつきはあまり重視しない方針らしく、二日目以降は、私も英語の授業で数クラスを担当する方に勢力を注がねばならなかった。

新任の身であるから、一時間一時間に勢力を込めていたせいもある。なにしろ、並のスピードではない。生徒がこなさねばならない分量は、普通高校の二倍以上の内容だったし、教師にも高いレベルが要求される。

いくら大学でESSに所属し、一年間のアメリカ留学の経験もあるとはいえ、生徒の能力の高さは想像を越えていた。いや、新米の私の授業など、聞いても聞かなくても同じというのかもしれない。英語の授業を、数学に変えている者たちもいた。

そんなときどき、松山のことが職員室で何度か話にのぼった。少し変だよという者。いやかなり度が進んできたという者。そんなことばが、理数担当の教師の口にものぼっていた。

椿は、「今のうちに手を打っておいた方が、よくないですか」と、謎みたいなことばをよこし、「去年の担任が、今年のクラス編成を知った途端に辞めた理由は、そこにあるのかもしれないよ」といった。

去年の一年F組の担任は定年間近の国語教師だったが、この三月で二年繰り上げて退職している。急遽担任に決まった(らしい)私とは、簡単な引継を兼ねて一度会っただけで、松山の話はなかった。もつとも、松山の直接担任ではなかったからかもしれないが、話の端にものぼらなかった。

一年A組で直接担任をした社会の教師は、半年間の外国研修に出ており、私の赴任とは入れ違いだった。

「ビッグスリーと呼んだものですよ。近年にないハイレベルの生徒が、三人も揃って入ってきたのですから。三人とも、中学時代から全国に名前を売った子ですね、三人が三人ともK高校に入ってきてくれるとは思いませんでした。一人や二人は、中央の有名進学校に進むものと決めてかかっていましたから。なにしろ、全国医師会副会長の子、地元B大学長の子、それに浜田という子です。案の定、入学直後の全国模試で、二人は全国の三十位以内に入りましたからね」

三月の、私の就職面接が終わった後、赤ら顔の校長は、吊りズボンからはみ出しそうな腹を揺すって、豪快に笑った。

そのビッグスリーのうちの二人は健在で、今も全国のトップテンの座を譲らない。

しかし、ビッグスリーから、準特進クラスまで降格した浜田、いや松山は、入学直後の五月の模試から成績が急降下し始め、みかねた校長や担任が何度か松山を呼んで訳をただそうとしたが、はどめがきかなかつたという。

こんな話も、私の担任としての勤めが始まってしばらくして聞かされたものであった。

「今のうちに手を打つ、とはどういうことでしょう」

私の問いかけに、椿は、「具体策は思い当たらないが、ちよっと予感がないではないもので」と、ことばを濁した。

椿をはじめ、理数の担当教師の話を寄せ集めてみると、理数の時間になると松山は急に饒舌になり、教師のことばの端から、「その定理はみせかけに過ぎない。真実が見えていない。先生は勉強が足りない。恥じるべきだ」などと、声を荒げるらしい。

私の英語のときにはないことなので信じ難いことであるが、椿の数学の時間に誘われて教室を覗いてみて、事実であることを知った。

丸い目を見開いた松山は、席から腰を半分浮かし、椿が板書した公式を指さしながら、「この公式は、三次元の時空でしか成り立ち得ない。しかも、ごく限られた狭い範囲でしか成り立ち得ない」と、早口でまくしたてる。

椿が松山を制し、クラスがざわめき始めても、松山は譲らない。

「学問は、真理の探求のためにあります」

「どうして、定説ということばを強調するのですか」

「定説とは常識という意味で、人間が定めたもの。しかも、それは先が見えていないということと同義です」

松山のことばに対し、

「松山を満足させるためには、真説だとか、真理だとかまでいかねばならないのだろうが、俺たちは、入試の答案に向かい、現実はこの公式を使って解を出さねばならないんだ」

「そんなことは、松山が進学した後で、研究室の壁に向かって、好きにだけ問答すればいいことだろ」

「俺たちは、松山のように、年中数学だけやってるといふわけにはいかないんだよ。一点を取るか失うかで、当落が決まってしまうんだぜ。いわんとすることはわからんでもないけどな、与えられた時間との闘いの方が先だ」

などと、方々から野次がとぶ。

「そんなことはわかっている。限られた時間だから、なおさら中身

のある時間の使い方をすべきじゃないか。君たちは、とんでもない間違いに対し、どうしてそんなに鈍感でいられるんだ」

松山は、心外だといわんばかりに、気落ちした表情を浮かべる。「ぼくたちが、大事な受験に直面していることぐらいわかっていて。だけど、このわずかのすれ違いが、大きな過誤を生むんだ。とても大切なことなんだ、これは」

クラスの連中が、松山のことばに辟易していることが明らかに見てとれる。思わず松山に向かって歩きかけた私を遮るかのようには、椿のことばが飛んだ。

「K高校の諸君は、いやしくも進学のことばかり頭にあるのではない。公式というものは、いわば現象をとりあえず整理するための約束事であり、条件であるといってもいい。真理云々を極めるのは、学者の領域だ。一つの公式の正否に、何十年も食らいついていけるという、条件に満たされた学者のために与えられたアルファであるのだ。勿論、そのアルファを追求することが理想であろう。しかし、K高校の諸君にとってより大事なことは、一つの約束のもとに整理された条件によって導かれるものなのたるか、を見抜く力を養うことにある」

椿は、松山を真直ぐに見て、いい放った。

松山は、なにかいいかげんに口元を動かしかけたが、肩を落とし、椅子に崩れ落ちた。

私は、松山のいうことももつともなことだと思いつながら職員室に戻ったのであったが、椿に肩を叩かれるまで、頭を抱え込んでいた。

「あれから、松山はなにも喋らなかつた。珍しくじつと、座ったままです」

次の授業に出なければならぬ私と、授業を終えた椿とは入れ違いになり、目くばせを交わした程度だったが、「少し考えさせてもらえませんか」というのがやつとだった。

英語の教科書を抱えてF組に入っていたのだが、松山を含めクラスの空気はいつもと特に変わらなかった。指名した松山は、かなり難解な時事の部分であったが、殆どつかえることもなく一気に和訳をこなしたし、他の生徒も同じであった。

授業の後、クラス委員長の久野を廊下に呼んだ。松山のことだとわかると、

「いつものことです。やつの持論のようですから。別に、僕らは困ってやしませんよ。みんなどこかでわかってるんです、やつのはいつてること。ただ」

と、少しいいよどんで、「あいつは振られちゃったんですよ」といった。

「振られたって」

「さあ、そこは」

久野は、私がそれ以上問いかけないとみると、始鈴の鳴り始めた教室に戻っていった。

なんだそんなことか、という思いだった。そんなことで思い悩むことなど、むしろ当然ではないか。よくありがちな、少年たち特有の問題なのではないか。

私自身、大学時代に交際していた女性との連絡が途絶えがちになつていたこともあり、少し気鬱になつていた。まして、十七歳の松山には、進学名門のK高校であるからこそ、思いどおりにはいかなることかもしれないし、しかも、トップスリーといわれた位置から、準特進クラスへの降格である。

「案外、少年らしい初な事情からなのかも知れませんか」

職員室に戻るや、椿にいった。

「少年らしい初な事情、には違いないでしょうけれど」

椿は、少し眉を動かしかけたが、

「やつの場合には、なにかひつかかるものがあるのですよ。というのも、一年前からの成績の急降下。いくなれば、K高校のトップから、いきなり中位以下ですよ。それとともに始まった、教室での暴言。この関係に注目してきたんですが、関係者は」

と腕組みをする。黒縁の眼鏡の奥で、細い目が二、三度瞬いた。

「この年代ですから、思いが通じなかったりすると、成績どころじやなくなるのかもしれない」

「入学試験で殆ど満点。六割が合格ラインのK高校ですよ。しかも、入学直後の全国模試では、六位。K高校では、一位というわけです。その子が、わずかその一月後には校内で二百九十二位。この関係ですよ」

「テストを白紙で出したとか」

「みんなは、その線をまず考えたわけです。いいや、いろいろな角度から考えましたよ。校長の強い要望もありましたし。でも、結局答えは出せないまま現在に至っているというわけです」

「カウンセリングの方も」

「もちろんです。しかし、これといった決定的なものとは出てこない。ええ、短期間の休学をしたりしましたが、復学してからというもの、理数の時間以外は、まずなにごともない。理数の時間といつても、ご覧のとおり、域を越えるわけでもない。職員会議では、昨年的一年間というものの、松山の話題ばかりでした」

「家庭訪問も」

「ええ、何度となくね。松山の母親にも、十回とはいわず登校してもらつて。ええ、とても賢い母親です。市のキャリア部長ですから

ね」

「女性部長、ときどき新聞で見る」

「ああ、地元B大学卒で、初の女性部長。青少年の健全育成が専門」
「先の総選挙で、声がかかったという」

浜田百合子という女性部長は、頻繁にテレビにも出、行政ウーマンとしてばかりではなく、青少年相談百十番の顔でもあった。

「なるほど。松山のもとの筋の良さはそこからきているわけですね」

「浜田百合子は、研究者の夫を事故で亡くしている。勤務する大学の研究室を出て、終便のバスを待っているとき、無免許のシンナー少年たちが運転するスポーツカーが猛スピードで突っ込んできた。彼は、博士の学位取得を目前にして、大詰めの実験に追われていたんですって」

その記事が十数年前、大きく社会面で扱われていたことを、私は覚えてる。

「彼と浜田の子が、松山というわけですよ」
なるほど、と思った。

「松山には妹がいますよね」

「二人とも、祖母、つまり浜田百合子の母が育ての親ということらしい」

椿は、例えば、と一つ前置きをして、

「浜田百合子って、何度か会ってみたんだが、少女なんです。見かけからも十歳以上若づくりだし、本当に子供を産んだことがあるのかと、頭を傾げたくなくなってしまふ。どうかすると、K高校の女生徒たちと、どちらが年上なのかと錯覚することがあるくらいですから。あれが、青少年百十番担当で、市の生涯学習部長なのかって」

「たよりない、ってことじゃないんですね」

「たよりないどころか、すごい存在感がある。それでいて、とても少女なんです。こんな人が同じ空気を吸って、同じものを食べているのか、なんて正直考え込んでしまった」

「とすると、松山は実の母に恋をしていて、それが、松山某という男に母を奪われようとしている」

「であると、ものごとはわかりやすいですがね」

椿は、空咳を一つした。

「こういう話もあります。松山は詩人でもあり、天文部に入った方がいいが、K高校に文芸部がないのを知ると、同好会を作った。同好会の呼びかけに、女の子たち七、八人が加わった。そのなかに、竹内碧もいる」

「竹内碧、ああ、少し足の悪い」

「彼女の瞳に出会うと、授業中ということも忘れてハツとなってし

まう」

「足が悪いということの故に、創造主は考えられ得る限り彼女を完璧なものにした、というのが、先生の口癖でしたよね」

「その『やや傾ぎ加減の立ち姿。なにか遠いはるかな思いに導いてくれる、淡い光の中の少女』というのは、松山の『少女』という詩の一節だけだ」

私も、A組の授業で、竹内の瞳に見つめられているのに気付き、ことばにしようとしていた次のフレーズを忘れてしまったことがあった。

足が悪いといっても、ほんの少し左足を引きずる程度で、何気なく見ていると見落としてしまいそうなくらいであるが。しかし、なんととっても、十七歳の多感な少女である。

「竹内は次号に、『青い光』と題する詩を発表した。『遠くはるかなるものが存在するとすれば、いかにして、このように残酷で、絶望的な仕打ちをしでかすことができるのか』ということばで始まり、『幾劫もの時空を束ねるのであろう遠くはるかなるもの。それは、どこまでも深く深く透け、どこまでも高く高く翔けりいく、ほのかな揺らぎにも似た青い光の』と続いていく。これが、松山に強い自信を与えるきっかけになったというのが、職員室でもつばらの話です。たかが生徒たちの詩ということだけで片付けるには、状況がかなり複雑なものでしてね」

椿は、竹内は浜田百合子とは違った意味での少女だという。

私はまだ浜田百合子にはじかに会ったことはないが、生活感のなさということでは、竹内もまぎれもなく希有な存在であろうと思う。

迂闊なことだが、まだ竹内の登下校姿を目にしたことがない。昼食時間にA組の前を通りかかることがあっても、竹内の姿は見えない。足の不自由さのため、体育を免除されているので、ジャージー姿なども見かけたことがない。ましてや、手洗い場の周辺で姿を見ることなどない。

という具合だから、竹内を目にするのは、週に二時限のA組での英語の授業のときだけであり、いつもあの瞳にじっと見つめられているという場面しか思い浮かばない。

二年A組は、K高校の上位者を集めたクラスであるから、授業が殆ど意味をなさない。

一学期には三年の内容を終えることになっており、ハイレベルの教科書を準備しているが、実際に使うのは、さらに難解なサブテキストの方であり、時事問題をテーマに、会話によるディベートを課したり、英文による論述を課したりする。

私の経験からいえば、大学の修士課程レベルにまでは十分達して

いると思う。しかし、彼らは国語以上に手慣れた様子で、退屈そうに私の指示に従う。

その中であって、竹内は決して目立った発言もしないし、かといって寡黙でもない。であるが、あたりから一人浮き上がって見える。着ている同じ制服までが、他の生徒のものと違って見える。グラビアから抜け出したよう、という表現は陳腐に過ぎるが、そうした形容が間違っているとは思わない。

彼女の詩のタイトルでもある青い光の中に包まれていて、じっと私を見ているといってもいいだろう。

その視線に出会うと、ふっと気が抜かれるほどのとまどいを覚えてしまう。

「竹内さんの意見はどうですか」

指名すると、竹内は音を立てずに立ち、やや首を傾げた格好で、「もう少し、時間をかけて結論を出しても、遅くはないのではないでしようか。勝者側は、いつもことを急ぎ過ぎるのかもしれない」

と答え、背筋を伸ばしたまま席に着く。結論に至りかけていた紛争当時国への軍事的、経済的制裁についての意見だった。

竹内の意見を支持する者たちが、競って数人手を挙げた。

竹内の瞳が、瞬きもせず私を見つめている。

瞳には、今いった自分の意見へのこだわりなどまるでない、といった微笑みが浮かんでいて、あわてて私の方が目を逸らしてしまつた。

逸らした目の奥から、しばらくの間、竹内の青い光の残像が消えなかった。

中間試験の初日だった。

朝のホームルームを終え、職員室で試験問題のプリントを確かめていた。

隣の机の椿が、肘を突ついた。

「お呼びのようですよ」

職員室の入口に、級長の久野が立っている。

用件を聞くまでもなく、久野の顔色を見ただけでクラスになにかが起きていることがわかった。

「今、ぼくたちが中間試験をポイコットすることは大切なことなんだ。学問そのものの正否の尺度も不明瞭だというのに、曖昧な尺度のままぼくたちは評価され、序列が付けられる。そして、その評価がぼくたちを分ける」

教壇に松山が立っていた。

「ぼくたちは、エゴイストへの道を突き進んでいるのではあるまいか。K高校の排他的で、独善的な校風の中にあって、Aランクだの

Bランクだの、あるいはCランクなら公立高校のトップにも負けな
いだの、ものごとを学習の到達度だけで計ろうとする。その、学習
の到達度それ自体が曖昧この上ないというのに、ぼくたちは思い
上がっていないだろうか」

松山の声はうわずってもいなければ、表情も変わっていない。む
しろ、淡々と話しかけているといった様子だった。

席を見ると、松山の話をもともに聞いている顔はなく、一時間目
の物理の試験準備に余念がないという様で、ただ歯科医の息子の松
村が、

「そげんゆうても、俺は医者にならんばならん。エゴイストなんか
じゃなくてもよ、先方から選別されるんぞ」

と茶々を入れると、
「きちんと、真理を探究したいとは思わないのか。われわれを包む
法則とはいかなるものか、われわれはいかなる意味で、今ここにあ
るのかなど、考えなくていいのか」

松山は、生真面目な顔で松村に応える。

久野が私の横で、大仰に両手を広げる欧米風のジェスチャーを見
せる。

予鈴が鳴り始めたため、松山は教壇を降り、自席に戻っていくの
だったが、色白の顔には気色ばんだ跡などなく、まるでなにごと
もなかったかのごとく席についていた。

クラスには学級日誌があり、二年F組は出席番号順の日当番が記
入することになっていたが、連休の少し前から松山のところで止ま
ってしまっただ。

学級日誌は、級長を経て提出され、担任が毎日目を通し捺印する
ことになっていて。それが、いつの間にか中身が松山ばかりのもの
になった。久野に訳を聞いたが、誰もが学級日誌は面倒臭がるらし
く、教壇付近に二、三日止め置かれていたのを松山が見つけ、当分
預かりたいというので任せているのだという。

「判断が甘かったんですかね。みんな面倒臭いことから逃れられる
と歓迎したんです」

私に提出される日誌は、記入欄を大きくはみ出し、松山が「寸評」
と名付けたかなり長い文章で毎日満たされるようになった。

「異状なし」や「特記事項なし」、という記述しかなかった日誌
が、急に壁新聞のごとくに変貌した。

寸評は、学校行事についての感想から、時事問題、さらに、松山
がかねて主張する学問論になり、人間が構築してきた文化である経
験に基づく科学への疑問となり、進学名門校である本校の予備校化
の実体への批判になり、詰め込み暗記を学習に置き換えようとする

ことへの批判となり、真にものごとを考えるという姿勢を放棄し、互いが点取り虫エゴイストに堕していると指摘し、異性への純粹な思いこそこれらを打破する糸口になるとする説を述べるなど、考えられ得る限りの意見や随想で埋められていた。

私にとつて、職員室での話題を独占している松山が、このようなかたちで舞台上に上ってくれたことはありがたかった。

「松山は、中学時代はどんな勉強をしたか」

放課後の教室に一人残っていた松山に、偶然通りかかったふうを装い、話しかけた。

「これといつて、特別なことはありません。ただ、父が残してくれた本を読み漁ってました。主に、文学の本を」

「お父さんは文学の方を」

「いえ、航空工学というものをやっていたらしいです。写真でしか見たことはないのですが、三十一歳で」

「これは、悪いことを聞いてしまった」

「平気です」

松山は、丸い目を大きく開いていった。

「全国でもとびきりの成績は、お父さんの本にあつたわけだ」

「自分でもよくわかりません。母は役所に出突っ張りでしたし、鍵っ子だったもので」

高校に入ってからからの成績のことまで聞こうと思つたが、例の寸評のことがあり、いいそびれていると、

「先生は、どうしてこんなめちやくちやな成績になつたのか、とおつしやりたいのでしょうか」

という。

「ぼくが人を好きになつたからです。それに、天文学を好きになつたからです」

「そうか」

「人を好きになることは、人間が一番真実になれることです。人を好きになれば、苦しいぐらいに神経を張りつめることになります。

つまり、一人の人の前に、謙虚になります。天文学も同じです。何光年、何億光年という時空の前に、一人佇み、激しい畏れと感動に打たれます。少なくとも、ぼくの場合はそうです」

「君の好きな人とは、つまりお母さんじゃないの。少女みたいに可憐で一途な、女性部長のお母さん」

松山は、ちよつと眉を動かしかけたが、静かに首を横に振つた。

「先生」

やや改まった声で、松山がいう。

「先生はぼくのことを、頭がおかしいのではないかと思つているんじゃないかもしれませんか。成績は急降下するし、数学の時間にはクラスの

和を乱してばかりいる」

「そうは思わない。ただ、松山ほどの男がどうしたんだ、という思いはある」

「やつぱり、ぼくのことを胡散臭いと思ってるんですね」

「ひよっとしたら、中学時代より今の君の方が輝いているのかもしれないが、それがなぜか、とね」

「ぼくが、ぼくに正直になることができたからです。といって、これまで、自分をごまかしてきたというんじゃないのです。これまでのぼくも同じぼくだし、今のぼくも同じ自分に変わりはありません」
松山の表情が、幾分曇った。真直ぐ見返してくる目に、悲しげな色が浮かんだ。

「母のことは大好きです。母というより、友人ですね。ぼくにあって母は、女性でもないし、生涯学習部長とかで新聞に載ったりする役人でもありません」

「お母さんが再婚されるということとは」

「母は、多分、見る人の角度によって少女のように見えたり、青少年の健全育成を旗に掲げた政治家のように見えたりするかも知れません。だけど、ぼくにっては友人です。僕たちの間には、合い言葉があります。『素足のまま』っていうんです。ぼくたちは、なにかにぶつかったときは、素足の自分に戻ろうと約束しています。だから、母が決めた再婚ならと、ぼくも妹も反対など考えもしませんでした」

中間試験の初日に、事件が起こった。

私は、初日の試験終了のチャイムを聞き、松山になんの動きもなかったことに胸を撫で下ろし、職員室で答案のチェックをし、二日目の準備をしていた。

電話が鳴った。

一年C組の女生徒の父兄からだった。

「緑川綾がまだ帰らないそうです」

C組の担任が、声をひきつけて叫んだ。

教頭の指示で、居残っていた数人の教師が教頭一人を職員室に残し、構内を見回ることになった。

教室、部室、トイレ、図書館と順に見回ったが、日の落ちた部屋には姿がなかった。本館から外は、二手に分かれることにした。運動場と、よく生徒たちがたむろしている体育館を見回った。しかし、どこにも姿はなかった。

「緑川といえど、地味なタイプだな」

「眼鏡のせいですかね。眼鏡をはずすと、結構いけるんじゃないですか」

「ちよつと線は細いけど、竹内に似たタイプだよな」
「いわれてみればそうですね。竹内よりもおとなしい感じはします
が」

「入試では、ベストテンだったよな」

「かなりのものですよ。サークルは、確か文芸同好会でしたね」
文芸同好会と聞いて、私のうちに、ふつと、運動場の端からちよ
つと上ったところの丘のことが頭をよぎった。学級日誌の寸評に、
よく丘のことが出てきた。その松山は文芸同好会の発起者である。

そう考えると、急に胸が騒ぎ出した。松山は、繰り返し中間試験
のボイコットを訴えていた。

私が急に駆け出したものだから、職員室に向かいかけていた椿た
ちが、追ってきた。

運動場の端には、鍵の掛かっているくぐり戸があり、草道を上
つていくと、見晴らしのきく丘に出る。校則で校外に出ることは禁
止されているのだが、昼休みに幾組かのカッパルが上っていくのだ
と、職員会議で風紀担当教師が問題にしたことがある。

まだ微かに明るみの残る草道を、走った。

なだらかな道ではあるのだが、息が苦しかった。胸の内でも渦巻くも
のがスピードを急に増したためでもあり、思いの外遠い距離のせい
もあった。

「あれだ」

椿が叫んだ。

丘の上に立てられた石碑の裏側に、松山と緑川とおぼしき女生徒
が俯せに倒れていた。

バラバラと後続組が駆け付けた。

「救急車だ」

「動かすんじゃない」

二人の肌にそつと触れてみた。温かかった。二人は、それぞれ一
方の手を互いの方に伸ばした格好で、二メートルほどの距離をおい
て倒れていた。制服の緑川の膝上と、足首は白い紐で結ばれている。

救急車が到着するまでの長い時間、私たちは二人を見下ろしたま
ま、誰も側を離れることができなかった。

二人とも、致死量には至らない睡眠薬を服用しており、発見が早
かったため、胃の洗浄などにより大事には至らなかった。

しかし、この事件がもたらした影響は大きく、しかも、松山が地
元の新聞社あてに、「ぼくたちは、考えることを放棄してはならな
い」という記事を投函していたため、事件を聞きつけた新聞社から、
心中未遂事件として報道されることになった。

K高校では、中間試験は予定どおり続けられたが、全校に動揺が

走るのを止めることはできなかった。

職員会議でも長時間を費やして、今後の対策を検討した。特に、松山が暗記、詰め込みの訓練と記した学習内容に議論が集中したが、進学の数値に全てを賭けるといってもいいK高校にとつて、方針を曲げることはできないことであり、であるならと、視点を変え、現在でも積極的に運営されている体育会活動を、よりレベルアップしていくことの確認がなされたりした。

「松山の相手が緑川だったとは、驚きだな」

「こうなると、竹内はなんだったんだよ。文芸同好会副会長の彼女は、かなり落ち込んでいるらしいな。どうして、選りに選って相手が緑川だったのかと」

「本来なら、緑川の役目は竹内が果たす筈だ、というのが顧問の話だけれど」

「果たしてそうだったんですかね。やっぱり、緑川が本命だったんじゃないかもしれませんか。現にそうだったんだし、身代わりに菓を飲んだりする者がどこにいます」

「松山と緑川との体の関係はなかった」

「当然でしょう。そんなレベルの話じゃないですよ、二人の場合。特に松山には」

そんな会話がかわされるのを、私は職員室の隅で聞いていた。私も、松山と竹内の関係については、なにもつかんでいない。ただ、松山が文芸同好会を結成するとき、現顧問のもとに松山と竹内が頭を下げてきたという事実は、他の教師も認めている。だからといって、二人の関係を特別なものだと断定するのは根拠に乏しいのではないかと思っている。

ただ、松山が竹内のことを歌ったとしか思えない『やや傾ぎ加減の立ち姿。なにか遠いはるかな思いに導いてくれる、淡い光の中の少女』という一節に、心を引かれている。

勿論、竹内は『遠くはるかなるものが存在するとすれば、いかにして、このように残酷で、絶望的な仕打ちをしでかすことができるのか。幾劫もの時空を束ねるのであろう遠くはるかなるもの。それは、どこまでも深く深く透け、どこまでも高く高く翔けりいく、ほのかな揺らぎにも似た青い光の』と続いていく詩で、松山への心情を吐露しているとみたのだが。

「ぼくは、人を好きになりました」

といったときの、松山のいく分はにかんだ真剣な表情を忘れていない。それは、ほんの一週間前のことだ。

松山百合子が、高校に姿を見せた。

松山百合子は、公的な場では、現在でも浜田百合子を名乗ってい

る。

黒塗りのタクシーから降り立った浜田の姿を目にしたとき、私はその無邪気としかいいようのない雰囲気、驚きの声をあげるところだった。

周囲には、制服の女子生徒がたむろしているというのに、浜田は彼女たちより若い。若いということばが適切でないとすれば、チャームリングであるといふべきであろうか。

唇には微笑みをたたえ、瞳をいたずらっぽく輝かせ、すらりとした姿形で、女子生徒の間を軽やかに縫ってくる。知らない人が見れば、学校に表敬に訪れた令夫人が到着したというところだろう。

「この度は、浩一がたいへんなご迷惑をおかけいたしましたして、申し訳ございません。加えて、緑川さんというお嬢さんをも巻き添えにいたしましたこと、それもこれも、わたくしの不徳のいたすところでございます」

校長への挨拶を聞いている私に、微かなミルクの匂いが漂ってきた。決して香水の匂いではない、幼い子供が発散するあの健康な匂いである。

「浩一も病院のベッドの上で目を覚まし、最初、なにがなんだかわからないようでした。ようやく、前後のことを思い出したと見え、学校や緑川さんには、取り返しのつかない申し訳のないことをしたと、涙を流しております」

浜田は、丁寧な詫びをいい、担任の私にも、
「今後ともお見捨てありませんように」とのことばを二度残して帰っていった。

一月经つて、緑川は登校してきた。もともと色白であった肌が、一月の間にさらに白くなり、眼鏡を外しコンタクトに変えたという顔は、以前の繊細だった面立ちは止めているものの、会う者を振り返らせるほどに目立った。

「新転校生かと見違えたよ」

「驚いたなあ。ニランクアップだ」

職員室でも、生徒間でも同じことばが交わされた。

「彼女の心の痛手の方、大丈夫ですか」

「やっぱり傷は残っているようですが、まるで憑き物が落ちたみたいに軽くなっています。なんでしょう、怖がっていたものの姿を知ったら、なにも怖いものがなくなった、などと話してくれましたけれど」

カウンセラーの担当教師が、不思議そうに首を捻っている。

「怖いもの。それは、松山に関係あることなんでしょうか」

「ないではない筈ですが、実際に表情がとても明るくなりました。」

彼女の場合、入学したばかりの一年生ですから、松山の話之余計に重く受け止め過ぎた嫌いがあります。この点は、私たちも含めて、学校全体の責任でもありますが。本人も、よくよく考えてみれば、自分だけ感情過多になっていたのではないかと、ようやく気付いたのではないのでしょうか。とはいえ、できるだけ彼女には注意を払っていたと思います。今の状態が、単なる一時的な気分の高揚ではないことを祈っています」

周囲の心配を余所に、緑川は自然にみんなの中にとけ込んでいった。周囲も、緑川をできるだけ特別視しないよう気配りに努めた。

もつとも、K高校の生徒や職員にとつて、一番の関心事は進学のことであつたから、校内模試や校外模試の結果が頻繁に掲示板に張り出されるので、話題はどうしてもこちらの方に移っていく。今年、国立A大学に四十人は堅そうだとか、来年はさらに十人は上乘せできるかもしれない、という話題が校内の空気を緊張に導いていた。

二年生でいうなら、松山を除いたトップスリーのうちの二人は、相変わらず全国のトップテンに名を連ね、二人に迫る者も数人名乗りをあげていた。歯学部志望の松村も、理数ではかなりの力をつけ、時々掲示板に名前を連ねることがあつた。

松山は、七月に入っても登校しなかつた。

この間私は、幾度か電話を入れ本人の声を聞き、二度自宅を訪ねた。この四月に引越してきたというマンションは、二軒分相当の間取りを一軒にしたとかで、かなりの広さだったが、訪ねていくときには、いつも松山一人だつた。

新しい父親は、現在隣県の大学に勤務しているとかで、マンションに帰るのは月に一度くらいだと聞いた。母親の浜田は、殆ど夜中まで役所に詰め、妹は私立女子中学の寮に入っているという。

松山は、訪ねる度に、磨きあげられた応接間に通してくれ、通いのお手伝いさんだという六十年輩の女性にお茶のサービスを頼んだ。

「ちょうど研究が暗礁に乗り上げていたところで、迷惑をかけてしまいました。申し訳ないんですが、事件をきっかけによじれていた糸がほぐれだし、先が読めるようになりました。今少しで、目鼻がつきそうです」

松山は二度とも、いく分紅潮した顔で対応してくれた。学校にはいつ出てくるのかとの問いには、

「迷惑をかけた緑川さんたちが、立ち直るまで、しばらく出ていかないつもりです。できたら、もう少し時間をかけ、自分のためにも、みんなのためにも、頭を冷やしたいと思っています」

た。緑川さんたち、ということばを殊更強調し、丸い目で私を見つめた。

竹内が妊娠しているという噂が、流れ始めた。気を付けてみれば、華奢だった腹部が少し前にせり出し、足を引き摺る度合いも強くなつたように見える。

「間違いありませんね。五か月を越えていますよ。まだ、母胎の安定期には入っていませんけれど」

「授業中が辛いらしく、三日続けて早退しました」
保健の教師と担任が、職員会議で報告した。

「困りましたねえ、K高校始まって以来の不祥事です。それにしても、このところ事件が続きますねえ。この大事な時期に」

教頭が、頭を抱える。

「相手は誰でしょう」

「当の竹内自身、いつもと変わらず、あっけらかんとしています」
「授業中は、例の透き通りそうな瞳を向け、熱心に授業を聞いてくれます」

「そんな、ねんねじゃあるまいし。一年次するとき、特別に女子生徒向けに婦人科医を招いて、そちらの講演してもらっています」

「ねんねではありませんよ。彼女の詩、結構ストレートに表現しています。例えば『命は、光とともに来る。白い、目も眩む光。光とともに命来たり、光とともに去る』とありますね。『白い光』と題する最新作のようです」

「詩人たちにも、困ったもんですな」
「で、竹内はお腹の子をどうするつもりだろう。なにか、情報はありませんか」

「産み、育てながら高校、大学に通うんだといっています。これは本人から聞いた話ではありませんけど」

竹内の家は、デパートを都心に経営しており、なんでも、母親の違う兄弟が六人いるという。竹内は末っ子で、母親はミスF市だったらしい。

「K高校も、後援会名簿をよくよく洗い直す必要があるのかもしれない」

私が赴任してわずか三月の間に、覚えているだけでもこれだけのことがあった。

K高校の授業に遅れず、こなしていくのがやっとの新米にとって、職員室が揺れる時間というのは、なんとも居心地のよくないものだった。

意見をはさむ間などなく、延々と続く議論をただ聞いているだけ

だった。

新米であるからこそ、翌日の授業の準備もしなければならなかったし、気の疲れる担任の仕事も工夫しなければならぬのに、目の前のことに、本来すべき時間を奪われるのは辛かった。

「新任さん、あんまり考え込まないようにね。なんでも、前向きにとらえることですよ。ちよつとでも後ろを見せると、背中からどつと疲れが襲いかりますから。しかし、それにしても、予想どおり二年F組が台風の目になりましたね」

椿が、ときどき私の背中をポンと叩いて帰っていく日々が続いた。「でも、県下でナンバーワンのK高校ですからね。教師も生徒も、そして後援会も。なあに、なにもかも時間が解決してくれませよ。いわば、選りすぐりのトップ集団です。問題解決にこと欠くことはありません。政治家も、官僚も、医師も、マスコミも、警察も、弁護士も、社長も、学者も、なんだって揃うんですよ。いざというときにはね」

確かにそうだった。

後援会役員の人選が意図的になされているのかどうかわからないが、地元の主立った顔ぶれが、殆どといってもいいくらい名前を連ねていた。

夏休みを間近にした午後だった。期末試験も終わり、どこかのどかな時間が流れていた。

騒ぎが起きたのは、事務室の方からだった。

教室のドアをノックして、若い事務員が顔を出した。手にメモを持っており、困惑の表情を浮かべながらなにもいわずに差し出した。メモには、「松山君が面会したいとのことですよ」と書かれていた。咄嗟に、変わったことに違いないと思い、クラス全員に自習を命じると、事務員の後についていった。

「やあ、しばらく。元気か」

折り畳み椅子に腰を下ろしている松山を覗き込む格好で、声をかけ、側の椅子を引き寄せようとした。

「先生、先生はぼくのことを疑っているんですか」

松山は、咳き込むようにいった。眉根を寄せ、目にはいらだちが見える。

松山のこんな表情は初めてだった。

「なんのことかな」

「ぼくの子供だっていったそうじゃないですか。竹内さんの」

「ああ、竹内の。誰がそんなことをいったの。私が、まさか」

「先生、誤解もはなはだしいですよ。なんですって、緑川と心中事件を起こすくらいだから、松山だったらやりかねないですって」

そんなことを私がいった覚えはない。職員室でも、松山のそのことには触れない。

しかし、考えられるとするなら、松山かもしれないという思いがないではない。

そういうふうだから、これほど勢い込まれて松山に聞かれると、誰にもなにかの動揺が走るに違いない。

松山は、私の動揺を見逃さなかった。松山はただでさえ鋭敏な神経をもち、今は病休中の、さらに不安定な状態にある。

「やっぱり、先生だ。先生がいい出したに違いない。そんなに、ぼくのこと、邪魔になるんですか。そんなにやっかい者だと思ってるんですか。思ったとおりだ」

「待ってくれ、先生は、松山のことを信じればこそ、疑ったりなどするものか」

松山は、私の顔を穴の開くほど見つめていたが、やがて、その目から涙を溢れさせ、同時に笑い出した。

「疑ったりなどするものかなんて、あんまりだ。やっぱり、思ったとおり信じたぼくが馬鹿だった、馬鹿だったんだよ」

松山の笑い声が、甲高く、ヒステリックになったものだから、通りかかった職員や、騒ぎを聞きつけた隣のクラスの生徒たちが駆け付け、事務室を覗き込んだ。

松山は、事務員二人に両脇を抱えられ、いやいやをしてみたいに、「馬鹿なぼくだけど、先生だけは、そんなことはないと思おうとしたんだ。なのに、やっぱりだ、チキショー」

と地団駄を踏み、叫ぶ。

「違う、松山、違うぞ」
私の方も動転しているものだから、同じことを繰り返すばかりだ。

「下がれ、下がれ、みんなクラスに戻れ。今は授業時間だ」
教頭や椿たちが、廊下の生徒たちを押し止めようと、大声を出す。体育の教師たちの、「何やってる、戻れといってるのがわからないのか。戻れ、命令だ」

怒気を含んだ、胴間声が聞こえる。竹刀か木刀かで生徒たちの胸を小突いているのだろう、「痛いじゃないかよう」という生徒の悲鳴が聞こえる。

「ぼくは、お人好し過ぎたんだ。チキショウ、顔など出さなきゃよかった。せつかく、研究が、ほんの後少しというときになって、こんな大事なときに、いったいどうしてなんだよ」

松山の声が小さくなったとき、私はやっとなんか返った。救急車の奥に、松山の姿が消えていくところだった。

「待ってくれ、少し待ってくれ」
外に走り出したときは、体育の教師たちに羽交い締めになされてし

まった。

「待ってくれ、離してください。お願いです」

椿が私の前を遮った。椿は、これでいいんだ、と頷いた。

「何度も、早めに手を打った方がいいんじゃないか、といったでしょう。四度目です、四度目。これで」

「なにがです」

わけがわからなかった。椿の方が驚いた顔になる。

「なにも聞いていなかったの。本当に。校長から、なにも聞いていなかったの」

真実驚いた、という顔である。

「それじゃ、担任なんてやれるわけないでしょう。嘘だろ、それらしいことを校長は必ずいった筈だ。まいったなあ」

そう突き付けられてみると、面接のときにも、なにかいわれたのかも知れないと考えてみる。面接のときは随分あがって、自分がなにをいったのかさえ覚えていないくらいだから、校長がそのつもりで情報を伝えてくれたことを、あるいは一般的な話だと勘違いしてしまったのかもしれない。

確かに、いったん決まった担任が退職することになったため、急遽補充するというので選考の場に臨んだ筈ではあった。

新学期早々、隣の席の椿は何度となく松山のことを話題にしたし、職員室の話題も松山の成績のことや、『新しい研究』のことや、詩のことだとかの話題に終始していたのだった。

「最初のときは、彫刻刀でクラス全部の机に穴を開けたんだって。みんな、トップスリーだった成績がガクンと落ちたんで、腹いせにやっつたんだと思って問題にしなかった。二回目は、冬の創立記念日。K高校伝統の講演会に、有名な科学者のT氏を呼んだんだ。化学分野での実証主義者で、N賞候補と目される氏の講演が始まると、氏の顔面にライトをあてる者がある。いつまでも止まないの、T氏はとうとう立腹して降壇してしまうところだった。ライトを持っていったのが松山、というわけですよ。例の、『それは真理ではない。定説に過ぎない』、という声を張りあげながらね。確か、松山は、その日から三か月ぐらい休んだ筈だ。ちやうど講演会に招待されていた、浜田生涯学習部長が松山によりそって、タクシーで返ったんだって。勿論、その後の詳しいことは平教師のわれわれには伝えられてはいないが、しばらく入院していたということだよ」

漠然とではあるが、これまでのことが読めてきた。

私は、松山の入学以前からの書類を丹念に調べてみることにした。すると、迂闊なことに、松山というのは、浜田百合子の旧姓であり、母が再婚したというのはどうやら目算違いで、婚家の浜田の籍

を抜かれたのが真相のようだった。

隣の大学に勤務する父というのも、こうなるとはつきりしないが、中学一年の妹は、実際に私立女子中学の寮に入居している。

ところで、二軒分の間取りを一軒にしたマンションとは、松山を匿うための離れだったとしたら、というところまで考えて、啞然とした気分になった。

浜田部長が、ローカル番組の「登校拒否生徒の問題」という中で、熱弁をふるっている。シンプルなデザインのスーツが、部長を若く引き立たせ、相手役のアナウンサーよりチャーミングに映っている。「ご家庭での、忍耐強い対応が一番だと思われます。決して、当人を責めない、落伍者だと決めつけないことだと思います。といいましても、直面していらっしやるご家庭では大変な問題です。その原因はどこにあったかと考え、その根本を押さえることも一つの方法ですが、実態はもっと根深く、もっと入り組んだ場合が殆どのようなです。こうなりますと、一家庭だけの問題を越えて、社会が共有すべき段階にまで至ることが少なくないと思われます。行政側としましては、青少年の健全な育成のために、新年度の予算で、総合相談所をできるだけ細かい地区単位に設け、専門の相談員を置くことにしています。また、相談所に向くこと自体の偏見などを生むことがないように、相談所は生活活き活きセンターと名付け、あらゆる生活上の相談や連絡、例えば法律相談、よろず相談、ボランティア活動などの係も置きまして、市民の皆様幅広く活用していただきたいと考えております」

といった趣旨のことを、にこやかに話し、番組は終わった。

私は、松山の「それは真理ではない。定説に過ぎない」という類の主張が、どこから生まれ出たのかと考えてしまう。

「被害者なのかもしれないね。あの母のあまりに無垢な姿、ここになにか鍵があるのかもしれない。勿論、根拠などないことですが」

かつて、椿が話していたことの内容も、頷けないことではない。こんなに理路整然と話せる浜田の実像とはいったいどんなだろう、という興味も湧いてくる。二人の子供を持ちながら、まるで生活臭が感じられない。

夏休み前に、浜田が校長室を訪れた。

今回は、予め連絡が入っていたとみえ、校長も担任の私を呼ぶことなく、二人で密かに話を片付けたものとみえる。

話を終えて帰っていく浜田の横顔を、教室から渡り廊下に出たところでチラッと見かけたただけであるが、これまでと違い、浜田は黒

っぽいスーツを着て、目深に帽子を被っており、サングラスではなかったが、縁のない眼鏡をかけていた。

横顔からの感じでいえば、脇目もふらず早足で校門への道に出、待たしているタクシーに乗り込むつもりようだった。

しばらくして、校長室に呼ばれた私は、松山がこの学年は休学することになったといわれ、医師の診断書を渡された。

診断書には、「熱症候群のため、〇〇年三月まで、入院加療を要する」とのみ記されており、要するに二年F組の間は登校しないということだった。

「熱症候群、ねえ。昨年と同じですね」

椿は診断書をかざし、これは病名でしたかねえ、と一人で呟いた。

「要するに、当分は松山のあの高邁な学説が聞かれなくなるということですね」

「となると、期待していた宇宙の新法則だとか、あれはまだ未完成のままですか」

小さな笑いが起こった。

そういえば、学級日誌はその後誰の手にも触れられず、教壇に置かれたままになっている。

結局、分厚く綴じた冊子の、三分の二以上が空白のままになってしまうのだ、と私はそんなことをぼんやり考えていた。

竹内の母もつい先日校長室を訪れていたから、一度に二人の休学者を出すことになる。

大きくなってきた腹が目につかないよう、二学期から休学させるのだという。

「竹内の相手は、わからずじまいですし」

「義理の兄ではないかなんて、噂もありましたけれど」

「やっぱり、一番噂にのぼったのは松山ですよ。しかし、彼には完全なアリバイがある。ライト照射事件の後で、入院中だったという、完璧な」

「竹内本人が、誰の子でもない、といい張るらしいですから。ほら、マリア様のように。実に、前向きですよ、彼女は」

「この学年は、いつになく、期待が大きかったんですが、話題もビッグですねえ」

「なんととっても、ビッグスリーの入学、これに湧きましたから」

「もう遠い日の、古い出来事になってしまった感がありますね。ほんの、先日のビッグニュースでしたのに」

「ここの子たち、おくるみで二重にも、三重にもくるまれて育ててきたのでしょうかね」

「その彼らが、やがて社会のトップになる」

「違うない、ですねえ」

職員室のざわめきを抜けて、教室に戻った。

夏休みを控え、サークルに出ている連中を除き、既にみんな帰宅している。

西日をまともに受ける室内には、山内の机を含め、四十一の机が並んでいる。K高校の場合、二年の夏がサークル活動の可能な最終学年となっているから、準特進クラスであるF組では、数人が最後の汗を流している筈である。

私は、教壇の袖の抽斗から学級日誌を取り出した。ページを繰る。中間テストの初日である五月二十八日を最後に、残された空白のページが重い。

松山によって書かれた一月程度のページが、細かな文字で埋められている。

ページを繰る。松山の、繊細で几帳面な性格を思い起こさせる文字が、横書きに欄を越え、書き連ねられている。考えてみれば、これまで、松山の文章をキチンと読んだことがなかった。

タイトルを拾っていく。

真理とはなにか、経験則即ち現代科学は真の科学ではない、天文学の勧め、命というもの、どこから来てどこへ行くのか、死について、愛を賛美する、いかにしてエゴイストは作られるか、宇宙を知ろう、などと毎日タイトルが変わっていく。

パラパラとめくっていくうち、コスモスダンスというタイトルのページが目にとまった。

「コスモス、即ち宇宙は、みんな一つであると思っていやしないか。勿論、究極の究極は一つであり、真理は一つでしかない。

ところが、宇宙は無数に存在する、といったら驚くだろうか。実際、無数、無限に存在するのだ。

これは、たった今、真理は一つしかないといったことと矛盾するではないか、との詰問を受けよう。

しかし、宇宙は現に無数、無限に存在する。ほら、そこにも、向こうにも、あちらにも、後ろにだって存在するのだ。

君やぼくが今見ている宇宙。君やぼくが生まれる一瞬前の宇宙。君やぼくが死んだ後の宇宙。もっともっと、気が遠くなるほど時間が経過した後の宇宙。そんな宇宙が、時系列とともに新たに形成されていくのだと思ったら、大間違いだ。

元から、そこに、今ある。

パラパラとページを繰るように、扉をくぐり抜けさえすれば、アンドロメダ座大星雲にだって、オリオン座大星雲にだって、この宇宙の外にある隣の宇宙にだって、簡単に行き来することができるん

だ。

ある意味では、死ぬって方法でね。

だから、死んだらお仕舞いだ、なんてナンセンス。死ぬってことは、たった一枚の扉を越えて行くという、しごく単純なことなんだ。だから、死んだって、決してお仕舞いになりはしない。

勘違いしないでよ。自殺を勧めたりなんかしてるんじゃない。それに、星や、太陽や、人や、動物や、植物や、いやいや空の雲にだつて命があるんだ。

こんな命が、いろんな生き方（いや、死に方といった方がいいのかな）をしながら、巡っている。三千年前のぼくから、今のぼくへ。今のぼくから、三十億年後のぼくへ。二千億年後のぼくから、五千年前のぼくへ、という具合にね。

ところが、それらもみんな今なのだ、っていうとこんがらがってしまうかな。

真実は、たった一つの宇宙の中で、無数、無限の宇宙が、規則正しく動いてる。そう、宇宙のダンスだよ。

ぼくは、この宇宙の法則を研究し、証明しようとしている。ちゃんとした手掛かりを見つけたんだ。

これは、大発見になる。いや、もともとあるものを見つけるんだから、発見とはいわないのかな。

とにかく、宇宙って、なんとって説明したらいいのかな。遠くて近くにある、高くて低くにある、っていう感じかな」

五月二十五日という日付になっている。

緑川との自殺未遂事件を起こした、三日前の記述である。

私は、ふーっと溜息を付き、窓の外のポプラの葉の翻りに目をやった。

私には、松山のいつていることが理解できない。

三千年前も、三十億年後も今である、という。たった一つの真実の宇宙の中で、無数、無限の宇宙が規則正しく動いている、という。

私は、後ずさりした。

激しい喉の乾きを覚えた。

多分、西日を遮るなものもない教室の明るさと温度が、私の神経を妙な具合に刺激したのだったろう。

目の前にライトが突き付けられ、私の輪郭がなぞられながら削り取られていく、という幻覚が襲ってきた。

なにもか全く知らない相手が、私の顔面を、毛穴の一本一本までを、覗き込んでいる。

息がつけなかった。逃げ出そうにも、足がいうことをきかなかった。大きな声を出そうにも、ことばにならなかった。

「疲れてますね、かなり」

職員室に戻ると、椿がわたしの顔を見るなりいった。

「でも、これは有名私立K高校のほんの一部の顔です。本番はこれからですよ」

椿は、あくびを噛み殺しながらいった。

黒板のスケジュールでは、夏休みとともに、夏季集中授業が平日と変わりなく組まれており、盆の三日間を除いて、それは延々と続いている。

「いやあ、名前だけは勇ましいものの、参加する生徒は半分といったところで、上位の連中は見向きもしませんから、楽といえれば楽ですよ。なにせ、連中は普段から授業など全く当てにしませんから」

椿は、自虐的にいい、

「特進の連中には、教科専門のぼくらでさえ解けない問題を、簡単にこなすやつらが半分以上いますからね」

とシャツのボタンを一つはずし、扇子で風を入れた。

「松山みたいな、いや、こんなことはよくあることですか」

「天才となんとか、というではありませんか。ぼくみたいな薄のろには、天才のなんたるかなどわかりませんがね。もつとも、このK高校に本物の天才が入ってきているのか、そこからして疑問ですがね。松山みたいな、彼みたいに、途中で奇妙なふうに変わっていく者が、結構いることは確かですが」

パタパタと扇子を使い、

「心臓に苔の生えたようなやつがいるかと思えば、カミソリみたいなやつもいる。要するに生身の人間ですよ。みんな、いろんなものをしよっていますねえ」

ハハ、と笑いかけて止めた。

椿はK高校に赴任する前、同系列のM高校に二年ほどいたという。M高校は進学校としては中堅どころであるが、放送部や美術部の活動で名前を知られている。

「なにせ、M高校出身のぼくがK高校の教壇に立つということからして、出鱈目なことらしく、生徒たちもよく知っています。その点先生は、輝かしい経歴の持ち主ですから」

椿は、博士課程を出ても職のなかった私を揶揄しているのか、と思つた。米国に留学もし、博士号を取ったまではよかつたものの、母校の助手選考に漏れたのがケチのつき始めで、公立大学はおろか私立大学の助手選考にも落ちてしまった。

未来の教授夫人を目当てにつき合っていたのかとしか思えない女友達にも逃げられ、自棄半分に、顔見知りが一人もいないK高校の、臨時採用の面接を受けたのだった。

「K高校にとつては、ドクター第一号でしたから」

椿の声が、遠くに退いていく。

また、あの激しい喉の乾きを覚え始めた。加えて、頭の芯が鈍く疼き出した。脇のあたりからは、冷たい汗が玉となって噴き出してくる。

K高校には七年勤めた。

K高校では、卒業まで同じクラスの担任を続けることが慣例であるが、二年F組の担任を終えた後、持ち上がりを辞退し、一年の担任に回してもらった。その生徒たちを卒業まで見届け、さらにもう一サイクル受け持った。

この間、私の内には、二年F組の担任を三年まで続けられなかったという悔恨に似た思いが、澱となり溜まっていた。その思いは、いつか私自身に食い込み、私の身を穿ていった。

教員しか能のない私であるが、他に職の当てなどないにもかかわらず、七年目の生徒を送り出した日、校長に辞表を提出した。

校長は予期しないことだったらしく、辞表を受理することはず、二、三日考えさせてくれと切り出した。三日後に校長室に呼ばれたとき、M高校の校長が同席していて、結局M高校の校長預かりの身となってしまう。

見た目には、振り上げた拳を中途半端に下ろした格好になってしまったが、成り行きに逆らうほどの意気地もなかった。

二年F組の連中は、殆どが目標を達成した。国立A大学に三人、国立B大学に十二人、普通クラスからの昇進組で歯学部志望だった松村は、その後力を上げ、当人も予期していなかった国立B大学の医学部に入った。

学年全体では、当初の期待どおり、国立A大学に五十一人の合格者を出し、K高校始まって以来という好成绩をあげた。しばらく、首都圏の高校に水をあげられ、低落傾向が続いていただけに久しぶりの快挙に沸いた。

しかし、その翌年には、国立A大学合格者は三十二人という平年並みの数字に落ち着いたところをみると、あの学年がいかに例年と異なっていたかが伺える。しかも、三十二人のうちの一人は、一年を棒に振った竹内だった。

本来だと、五十一人に、竹内と松山を加えた五十三人の可能性もあったのだ、との皮算用も出鱈目な話ではない。

私が三年目を終わろうとする三月、浜田百合子が来校し、松山の退学届を出しにきた。

元担任ということで私も校長室に呼ばれ、浜田と直に話すことが

できた。

「もうすぐ、法則が完成すると、夢中で毎日を過ごしています。勿論、病室ですけれど。先生には、法則が完成したら真先に報告するんだと楽しみにしています。昨日も、カニ星雲まで出向いて、この世のものとも思えない星雲の鮮やかな光芒に見とれてしまい、帰るのを忘れるところだったといえますよ」

浜田部長は、シミ一つない顔を少し歪め、涙ぐみそうになったが、すぐに笑顔に戻った。

「いいえ、あの子は幸せですわ。ノート数十冊にびっしり数字を書き込んで、無数にあるという宇宙の姿を割り出しているらしいのです。本当に、ぼくたちは無量大という実存に繋がっているんだ、な」とわくわくしているんです」

マニキュアをしていない指には、健康そうな形のよい爪が品よく伸びており、その指が今、自分の子供の退学届を差し出したのだとは、にわかには信じ難かった。

「松山君は、私たちには見えないものが、確かに見えるのでしょね。そう考えていくと、頷くことが多いんです」

私が勇をふるっていうと、

「これまで、自分を正面から抱きとめようとしてくれたのは、先生だけだと口癖みたいにいいますのよ」

浜田は、心の底から湧いてくるといった笑顔をつくり、「たいへんお世話になり、感謝しております」とのことばを残して帰っていった。

私は、溜息をついた。いいよのない、疲れを覚えた。

「とうとう、戻ってこなかったか」

椿が、感慨深げにいった。

「やつは、トップスリーの片割れたちが卒業したことを知っているのかな。やつのことだから、国立A大学に入ることなど、俗っぽいことだとしか考えないかもしれないが」

松山には、その後一度も会っていない。しかし、松山の存在はいつもどこかに感じている。

「先生だけを信じていた。先生だけが、ぼくを正面から抱きとめようとしてくれた」

ということばを、浜田から聞いたからかもしれない。

自分は、確かに松山の存在を感じている。かといって、浜田がいったふうには松山を感じていない。

松山は、今も病室で、変わらず私のことを思い、クラスのことを思い、宇宙の法則だとかのことを考えているのだろうか。

人づてに聞いた話では、松山は隔離棟ともいえるべき個室に入って

おり、個室外には出たことがないのでないか、というものだった。ところが、松山の姿を学校の運動場を上ったところにある丘のあたりや、隔離棟のあるDインターチェンジのあたりで、何度か見掛けたという噂があった。

「手には、懐中電灯みたいなものを持ち、出会う人毎に、その顔に向けるのさ」

「いいや、あれは手鏡さ。陽の光に手鏡をかざし、反射させるのさ。一人一人の表情の内にかくされたものを照らし出し、調べようともするみたい」

などということが職員の間でも、生徒たちの間でも話されている。「でも、かわいそうにな。いつも青っぽい囚人服みたいなものを身につけ、青白い顔で丘を下っていく。しかし、その身のこなしは、結構すばしっこいんだ」

「当然、外には出られない筈だがな」

「あの松山がなあ。中学時代の成績からは、どこまで伸びるか、末恐ろしいくらいの期待をさせられたのに。もつとも切れ過ぎて、中学時代から、カミソリの刃をなぞるみたいな危うい感じであったとは聞いたけどな」

「浜田部長も、仕事柄、松山を社会に連れ戻すわけにはいかんのだろ。因果なことだよな」

「いいや、誰のせいでもなく、もって生まれた性だろうよ。松山自身が承知の上で、その道を選択したのさ」

職員室は、松山の退学をめぐってしばらくその話題で沸いたが、話題は移り、松山のことはいつか過去の問題になっていった。

電車は、終点の駅に近付いた。

気怠そうだった乗客たちは席で伸びをしたり、立ち上がって棚の荷物を下ろしたりし始めた。

初夏の陽が、車内を黄色に染めあげ、否応なく現実の時間に戻してくれようとする。

アナウンスが、乗り継ぎの案内を始めた。

私は、時計を覗き込む。到着時間はいつもと変わらない。駅前から、すぐにバスが出るので、いつまでも車外の景色に見とれている余裕はない。

K高校に勤務していた頃は、駅前から経路は違うが、ほぼ同じ時刻のバスに乗った。

駅前のバス停には、K高校の生徒も、M高校の生徒もいて、K高校の生徒や教師が中央に陣取り、声高に喋ったりしているのに比べ、M高校の生徒たちは、片隅で静かにバスを待っている。

かつて、私もバス停の中央部分に立ち、誰彼となくつかまえ、国

立A大学の方はもう一歩だとか、国立B大学も滑り止めはどうだ、などということあたりはばからず話していた。

M高校の方では、国立B大学に入るのも大変なことであるから、隔世の感である。もっとも、M高校には、デイベートもなければ、エゴイストを云々する芽もない。まして、宇宙の法則を解くなどという発想は、教師たちにさえない。

今、放送部のコンテストで全国大会に出場することが決まったというところで、全校をあげて盛り上がっているし、文化祭を充実したものにするために知恵を絞っており、今年から市内パレードを企画しようとの案も出されている。

しかし、今も私の心の内から、松山のことが消え去ることはない。

最初の担任だったということにもよるが、松山からの念波にも似たメッセージが、今も変わることなく届けられているのかもしれない、と思っている。

(了)